

五味淵典嗣・日高佳紀編『谷崎潤一郎読本』

田口 律男

「決定版」全集から始まる谷崎研究の羅針盤

編集委員会から依頼されたこの書評。

さてどんなスタンスで臨んだらいいか、いろいろ考えた。そもそも読者対象は誰なのか。専門家（研究者）向けの書評なら、それ用の媒体にほぼ出尽くしている。

でも、ここは奈良教育大学国文学会の機関誌。読者は、たぶん学生さんや卒業生がほとんどだろう。（ちがったら、ごめんさい。）教育大学だから卒業生は教員が多いのだろうか。もしそうなら大学で学んだ専門知識が通じず、悪戦苦闘している人も多いだろう。また教職には就かずとも、実社会のどこかで、言葉の落差に戸惑っている人も少なくないのではないか。（個人的には、家事・育児を含む日常

生活こそ、文学・教育の主要な戦場だと心得

ているが、そこでは専門知識は無力であることが多い。）そういう現場に生きる人たちに、専門家向けの閉じた書評を届けよう、あまり益があるとは思えない。

しかしながら、これから卒論なり修論なりを書くこうと身構えている学生・院生にとつては、この本の強度を体感することとは大切だ。それに、この本自体が潜在的に、研究者や谷崎ファンダムを読者対象に選んでいる。それは執筆者の顔ぶれ、その文体をみれば明らかだ。くわえて書評する私自身も、コテコテの文学研究者ときている。とすれば、ひとまず専門的なスタンスに偏ることは避けられない。でも、そこがゴールとは思いたくない。

なるべくなら日常生活につながる回路で、対象をビビッドに捉え返してみたい。少なくとも当事者の顔が見えるような、体温の感じられる書評へ。——そんなことをボンヤリ念じながら、まずはこの本の特長を自分なりに吟味するところから始めたいと思う。

*

「ずいぶん手の込んだ贅沢な本だな」

——というのが、第一印象だった。紙質とか装丁とかはいうに及ばず、内容がとにかく豊富なのだ。構成面から確認してみよう。この本は冒頭に、座談会「複数の「谷崎」をめぐる——新発見資料「創作ノート」を手がかりに」を掲げ、以下、五つのテーマのもとに、論文二八本、コラム七本、さらに巻末に「谷崎潤一郎全作品事典」を配して、現時点で考えられ

るほぼすべての論点を網羅している。

もともとこの本は、谷崎生誕一三〇周年（没後五〇年とも重なる。）と、中央公論創業一三〇周年とを記念して刊行された『谷崎潤一郎全集』（決定版・全26巻、中央公論新社）に並行して企画されたように見える。（日高氏は「編集後記」で「偶然」と述べているが、少なくとも両者は互恵関係にある。）そのためか、全集に収められた新資料（創作ノート全11点、晩年の日記8冊など）への目配りも怠りなく、この「決定版」全集から始まるであろう今後の谷崎研究の針路を示す重要な役割を果たしている。

冒頭の座談会では、編者のふたりがホスト役になって、全集の編集委員を務めた千葉俊二・明里千章・細江光の三氏と、『細雪』の解題・本文校合を務めた若手の西野厚志氏を迎え、新しい谷崎像をめぐって縦横に語りあっている。その内容には立ち入らないが、世代も文学観も研究方法も異なる六人が熱く語りあう様子から、彼らを惹きつけてやまない谷崎テクストの魅力と熱量が伝わってくる。し

かし、それはいわゆる「大谷崎」へのオマージュとは異なる。「本書でわれわれは、比類なき芸術家としての「大谷崎」を、いたずらに礼賛し、顕彰したいわけではない。谷崎テクストに刻まれた途方もない失敗といくつもの躓きを、20世紀の日本語にかかわる歴史的条件の中で展開された思考の限界として見つめながら、一方で、彼のテクストから聞こえてくる軋みや、社会や文学の制度を揺さぶるざわめきの声にも耳を澄ませたい。／われわれは、いまだに谷崎潤一郎のことを知らない。テクストとしての彼との新しい対話が、いま、ここから始まるのである。」

——この格調高いマニフェストから伝わってくるのは、谷崎潤一郎という実体に（それ自体、様々な言説によつて歴史的に構成されてきた虚構だろう。）をいったん括弧にくくり、「谷崎潤一郎」という記号のもとに集積された個々のテクストの動態を、それらを圍繞する社会システムとの緊張関係において捉え返そうとする勁い意志である。日高氏はそのことを「作

者の死」（R・バルト）ならぬ「作者の社会化」（二一九頁）という概念で捉えようとしている。その謂は、「単に固有名には還元せず、伝記的な事実にも置き換ええないで、作者を社会的な存在として見直そうということ」（二一九頁）なのだが、こうしたアプローチの是非については、後段で改めて吟味したいと思う。

*

少し内容に入ってみよう。前述したように、この本は五つのテーマ設定のもとに、二八本の論文、七本のコラム、巻末に「全作品事典」を収録している。本来介したいところだが、それだけで残量が尽きてしまうので、テーマ設定の仕組みについてのみフォーカスしよう。

- I 小説機械、谷崎潤一郎
 - II 谷崎をめぐるメディア・イメージ
 - III 接続するテクスト
 - IV 谷崎テクストの現在地
 - V 谷崎潤一郎論のために
- こうしたテーマ設定と執筆者の選定こそ、編者の手腕が問われるところだと思

う。(そして、それは見事に成功している。)

パートIは、巻頭論文の位置づけで、編者二名を含む五名の論客が、文字通りラディカルな谷崎論を展開している。パートIIは、メディアにおける伝達様式と谷崎テクストの情報内容との重層的な関係を、八名の論者がそれぞれの角度から論じている。パートIIIは、谷崎テクストと他領域(映画・装幀・音楽・美学・京都人脈)との接^{テクニカル}触^{コンタクト}面を、五名の論者が独自の視点で追究している。パートIVは、語り・ジェンダー・クイア・モダニズム・翻訳／文化政治・帝国・身体・消費文化・検閲・生成論といった文学研究の新たな切り口を通して、一〇名の論者が谷崎テクストの個性と多様性を論じている。パートVは、谷崎潤一郎の文化資本にかかわるデータ(家族・友人・秘書・映画・装幀・舞台)をコラム形式にまとめたものである。

こうしてみると、この本がいかにか盛り沢山で、バラエティに富んだものであるかが手に取るように分かる。だが細かいことをいえば、各論文の論旨とテーマ設

定とが必ずしも一致していないケースが見受けられるし、共通する問題意識をもつのに、別のテーマ設定に振り分けられた例も散見される。むろん、こうした意図せざる逸脱や共振は、事後的に見えてくるもので、それらは発見の悦びにこそなれ、編集の瑕疵にはつながらない。そこで書評子としては、ちよつとした小細工を弄し、これら二八本の論文をいまい度シャッフルして、より問題の所在を明らかにしてみたいと思う。(それが読者の役に立つかどうかは疑問だが……)以下に、おおよっぱな見取り図を示す。

- ① 身体にかかわる領域
 - ② システムにかかわる領域
 - ③ テクストにかかわる領域
 - ④ 作家情報・文学史にかかわる領域
- こうした分類はあくまで便宜的なもので、どの論文もいくつかの領域にまたがることは断るまでもない。だが、あえてカテゴライズすることで、似て非なるものの微差が見えることもあるし、そこに問題の核心が宿ることもありうるのである。

①「身体にかかわる領域」は、谷崎テクストに不可欠なセクシュアリティやジェンダーにかかわる問題はもちろんのこと、その枠組みからはみだす「身体政治」(坪井秀人)や「ケアの思想」(飯田祐子)も含まれる。また、谷崎テクストにおける五感要素(音楽)の変遷を辿る真銅論文、映像に変換された身体を論じる城殿論文をここに加えてもいいかもしれない。以下がその一覽である。(副題は略した。)

- ▽飯田祐子「谷崎的性世界における男性性の多重化と構成的外部」(I)
 - ▽五味淵典嗣「漱石を裏返す」(I)
 - ▽生方智子「ジェンダー理論から読む谷崎」(IV)
 - ▽岩川ありさ「クイア作家としての谷崎潤一郎」(IV)
 - ▽坪井秀人「谷崎テクストの身体政治」(IV)
 - ▽真銅正宏「音楽要素とその用法の変遷」(III)
 - ▽城殿智行「輝く太陽の下で」(III)
- ②「システムにかかわる領域」は、大

大きく二つに分けられる。ひとつは、活字媒体を中心としたメディア環境と谷崎テクストとの重層的な関係を問うもの。「造本、装幀、挿絵」(木股知史)なども含まれる。もうひとつは、メディア環境にとどまらず、言語(文化)・資本(経済)・ネーション(政治)にかかわる近代の諸制度(システム)と谷崎テクストとの関係を問うもの。具体的には、「翻訳」(榎原理智)、「流行(モード)」(瀬崎圭二)、「学問史」(中村ともえ)、「国際感覚」(西村将洋)などが含まれる。

▽日高佳紀「メディアのなかの〈自画像〉」

(I)

▽笹尾佳代「事件としての「細雪」」(II)

▽安藤徹「『谷崎源氏』の物語と国民作家への道」(II)

▽井原あや「スキヤンダルと純文学」(II)

▽石川巧「谷崎潤一郎と占領期文化」(III)

▽木股知史「『近代情痴集』をめぐる」

(III)

▽中村ともえ「学問としての美学」(III)

▽榎原理智「翻訳のポリテクニクスと『陰翳礼賛』」(IV)

▽瀬崎圭二「消費文化としての〈江戸趣味〉」(IV)

▽西村将洋「谷崎潤一郎と国際感覚」(IV)

▽牧義之「谷崎潤一郎と検閲制度」(IV)

③「テクストにかかわる領域」も、大きく二つに分けられる。ひとつは、創作ノート、自筆原稿などの一次資料に基づいて、推敲・改稿過程を追いながら、作家谷崎の創作意識にアプローチするもの。もうひとつは、テクスト論の成果を踏まえ、語り・書法・物語論などの視点からテクスト分析を試みるものである。

▽千葉俊二「反故原稿にみる創作力学」

(I)

▽西野厚志「自筆原稿・創作ノート」(IV)

▽五味潤典嗣「漱石を裏返す」(I)

▽大浦康介「谷崎と〈本当らしさ〉」(I)

▽金子明雄「物語の〈空白〉を操作する」

(IV)

④「作家情報・文学史にかかわる領域」は、谷崎潤一郎の個人史や環境要因を問うものだが、文学史の観点からアプローチしたのも含まれる。

▽平野芳信「美神と谷崎潤一郎と三人の

妻」(II)

▽徳永夏子「『将来の文壇に於ける谷崎氏の位置は殊に重要なものとなるであらう』」(II)

▽篠崎美生子「筋のない小説論争」の周辺」(II)

▽山本亮介「『国際的』作家の陰翳」(II)

▽杉山欣也「追悼文における谷崎像と『文壇』」(II)

▽森岡卓司「谷崎潤一郎の描く辻潤」(IV)

*
くりかえすが、以上の再編プランは便宜的なものだし、すべてがジャストフィットしているわけでもない。だが、おなじカテゴリーに括ることで、いくつかの論文の微妙な差異(もしくは類似)が際立つようになるのではないか。たとえば①「身体にかかわる領域」では、「刺青」評価をめぐって、生方論文と坪井論文との間に齟齬が生じていることが分かる。前者は、「女というジェンダー」がパフォーマティブに構築される過程に注目し、そこに「既存の秩序や価値を乗り越える」(二〇九頁)可能性を探っているが、後者は、

谷崎テクストにおける「身体表象の実験」(二四〇頁)を評価しつつも、女性拝跪にひそむデカダニズムやマゾヒスムには限界性をみいだしているからだ。(谷崎的マゾヒスムにひそむジェンダー・半がティクスについては、飯田論文・前半がさらに手厳しく分析を加えている。)いっぽう飯田論文・後半と五味渕論文との間には、(扱)うテクストは異なるものの、倒錯した異性愛構造とは異なる「身体接触を伴うケアワーク」(七二頁)の可能性をみいだす点で類似が認められる。こうした論文間の見えない応酬にこそ、谷崎研究の新しい可能性が暗示されているのではないだろうか。

③「テクストにかかわる領域」においても、おなじような応酬が認められる。まず千葉論文と西野論文。両者は一次資料に基づいて、推敲・改稿過程を追いながら、作家谷崎の創作意識にアプローチする点では共通するが、前者が「創作上での発想のクセ」や「ストーリーを展開させるうえでひとつのパターン」(三六頁)を問題化する点で、より作家論的で

あるのにたいして、後者は「作家に統御された草稿から最終稿へと至る目的論的な創作過程としてではなく、様々な諸力が織りなすテクストの動的な生成過程」(二五五頁)を重視する点で、よりテクスト論的であるといえる。いっぽう大浦論文と金子論文は、物語論ナラトロジーのフレームワークを駆使することで、谷崎テクストにおける「形式的本当らしさ」(大浦)や、「説話論的機構」(金子)の内実を分析記述する点で類似する。しかし、前者が谷崎の一人称小説における語りの戦略にこだわることに対し、後者は「小説の筋」論争後の犯罪小説や大衆小説における語りの戦略にこだわる点で差異が認められる。ただしこれらは、たがいに補完しあう関係にあり、テクスト論以後の谷崎研究のひとつの達成を示しているといっていいたいだろう。

ここで編者のひとり五味渕氏の論文に注目してみたい。谷崎の「蘆刈」を再読したこの論文は、さきの再編プランでは、①「身体にかかわる領域」と③「テクストにかかわる領域」の両方に登場してい

た。①の論点は、「蘆刈」の「女二人と男一人の三角形」に「身体接触を伴うケアワーク」や「クイアな関係性」(七四頁)を探り、そこに漱石の「『こゝろ』的三角形」に対する「痛烈な批評・批判」を読みとるものであった。しかし、ここから五味渕論文は急転回し、③「テクストにかかわる領域」に踏み込んでいく。結論だけいえば、「蘆刈」の「複雑な語りの形式」は、「物語内でのコミュニケーションの可能性を前提」(七四頁)にしており、①身体レベルの可能性と齟齬をきたすというのである。(ちなみに「蘆刈」における語りの分析は、前述した大浦論文とほぼ一致している。)つまり、五味渕論文は①と③の視ポインツ差を問題にしているのであり、その正否も含めて、今後の重要な問題提起になっているだろう。

最後に、日高氏の論文に注目してみたい。日高論文は、さきの再編プランでは、②「システムにかかわる領域」のなかの、活字媒体を中心としたメディア環境と谷崎テクストとの重層的な関係を問うたものである。おなじカテゴリーには、出版

戦略や作家イメージとの関係で、『細雪』、『源氏物語』現代語訳を捉え返した笹尾論文や安藤論文も含まれる。ただメディア環境や出版戦略を視野に入れるといつても、それらを単に作家をとりまく環境要因のひとつに限定するならば、従来の作家論パラダイムを超えることは難しいだろう。日高論文は新聞連載小説「鬼の面」の「読者戦略」（八三頁）を採ったものだが、挿画の機能、語りと人物表象の関係、主人公の認識枠組み、ジャンル規範との関係などを多角的に分析した点に特長がある。（欲をいえば、身体↓システム↑テクストを自在に往還するさらなる強度が欲しい。）活字メディアが独立したものではなく、言語・資本・ネーションといった近代の諸制度との関係において現象するものである以上、それらとの関係を視野に入れる必要があることは贅言するまでもないだろう。日高氏のいう「作者の死」ならぬ「作者の社会化」とは、そうしたパースペクティブを内包した方法論として理解したい。

*

もはや紙数も尽きた。冒頭で専門家向けではない「体温の感じられる書評へ」などと偉そうにいつておきながら、結果は散々なものになってしまったようだ。それどころか卒論や修論をめざす学生・院生にとつても、あまり有益な書評たりえなかつたような気がする。ただ少し言い訳するならば、先に挙げた①「身体にかかわる領域」、②「システムにかかわる領域」、③「テクストにかかわる領域」は、私たちの日常生活にも深く根を下ろしているはずだ。たとえば家事・育児ひとつとつても、（たとえそれが自覚されないとしても）この三つの領域は介在している。むろん谷崎の「テクスト」の内部にも、「身体」と「システム」の錯綜した関係性が幾重にも織り込まれているし、その「テクスト」を読む私たちの「身体」もまた様々な「システム」のなかに投げ込まれている。この本を手取ることは、そうした「身体」と「システム」と「テクスト」とを交差接合させ、いま・ここを異化する手掛かりを手に入れることでもある。それがたとえ混乱や苦痛を伴うもの

であつたとしても、思考停止のまま、誰かに白紙委任して日々を生きるより、その負荷を引き受けるほうが、はるかに人間的であり、実存的である。それこそが人間の尊厳というものなのではないだろうか。

〔A5判・三五六頁・翰林書房・二〇一六年一二月刊〕

（龍谷大学教授）